

# 赤★☆☆★星

THE SEKISEI (RED STAR/ROTE STERN)  
編集 共産主義者同盟 (DER BUND DER KOMMUNISTEN)

No. 72  
(通巻414号)

2009年 1月  
本号 400円

発行所 蜂起社 東京都江東区大島 3-9-25  
TEL 03-5626-8262  
発行人 南 安明 (隔月発行)

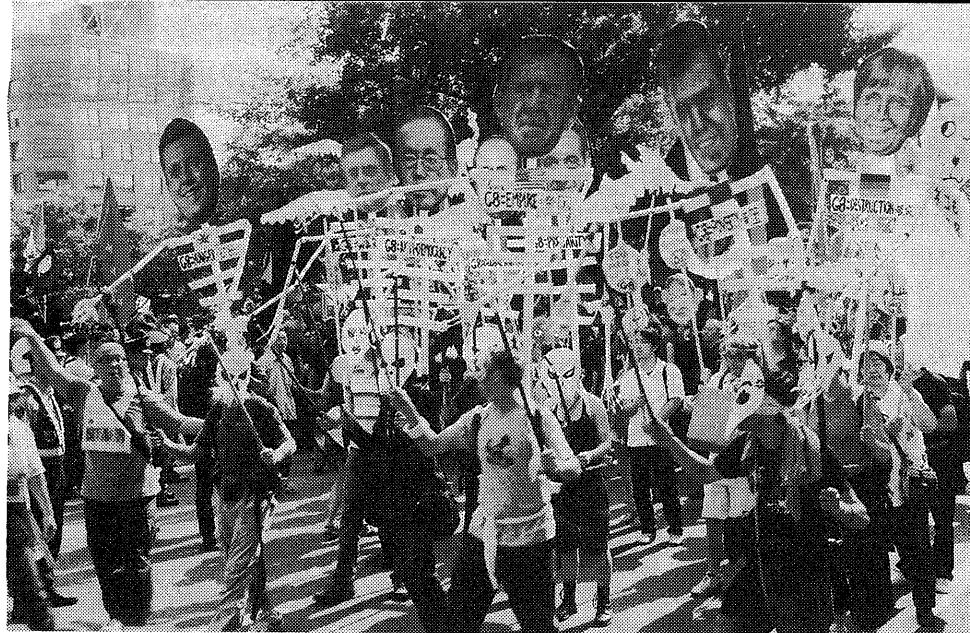
年間購読料 1部 3000円 (送料込)  
(振替) 00120-2-1512 蜂起社・南安明

## 新時代の扉を開く

## 共産主義者協議会の結成へ

## 『赤いプロレタリア』3月創刊!

### ★ 共産主義者同盟 (蜂起派) 檣 渡



#### 新時代の扉を開く 共産主義者協議会

「米国覇権」(パックス・アメリカーナ)の世界秩序が大きく揺らいでいる。グローバル化した経済危機は、「恐慌前夜」の様相を深め世界同時不況と大失業時代の到来を告げている。今や世界は大きな激動と変革の時代、転換期を迎えているのである。

政治や経済の既存システムが深刻な危機に直面している時、従来の枠組み・やり方・パラダイムの転換と再編は避けられない。問われているのは、支配階級が危機に陥って今までのやり方が通用しなくなっている時、被支配階級がそれを変革への「好機」へと反転させることができるかどうか、そのためのイニシアティブを発揮できる「前衛」が存在するかどうか。我々新左翼・共産主義者は、この「時代の要請」にどう応えるか、重い責任と役割がある。

いま「新しい左翼」に求められていることは、第1に現状を打破しない限り遠からず立ち行かなくなるという危機感、第2に自らの立ち遅れ・弱さから目を背けないという自覚であり、第3に情勢を反転させ展望を拓くことへの情熱である。そして、この危機感と自覚と情熱を共有して、反グローバル化運動のうねりを起こすためのイニシアティブと果敢な行動が要請されているのである。

世界がグローバル化と新自由主義によって、貧困・不安定雇用・社会的排除など新たな問題に直面している時、国際的な運動事情に疎く、時代遅れの古臭い言葉でしか情勢を語る事ができない、そんな「懐メロ」的政治センスがこの国の左翼のダメさ・適応不全と衰退を象徴しているのである。「貧困問題」や「蟹工船」ブームに乗って時流におもね突っ込みやすいターゲットを見つけてはお茶を濁しているだけで、新機軸を立

てる構想力を欠き、見通しのなさや停滞をごまかし前進を「偽装」しているだけの左翼(日本共産党など)も少なくない。だから閉塞した政治状況に無頓着で展望喪失に陥っていることにも鈍感なのだ。こうした旧弊を破り従来の思考-行動様式から脱却しない限り、政治の転換と再編の渦の中のみ込まれ左翼としての存在意義さえ失いかねないであろう。

我々に問われているのは、5-10年先を見据えて、新しい左翼運動-反グローバル化運動を前進させていくために、今どんな戦略、運動-組織論、イニシアティブが必要なのかという議論だ。

ブント結成から50年、マルクスの共産主義者同盟宣言(いわゆる「共産党宣言」)から160年を迎えた今日、世界をラディカルに変革するためにどのような前衛とイニシアティブを創造するのか、プロレタリアの国際的な連帯を築くためにどう

力を合わせ連帯するのか。それが今後の共産主義運動にとって、新時代の扉を開くための最大の焦点になるであろう。このように、「今、何をなすべきか」は明白である。

我が共産同(蜂起派)は、その前衛の任を担うことを期して、2009年3月、ブント系諸団体(共産同首都圏委員会、同プロレタリア通信編集委員会)および諸個人と力を合わせ、「新しい左翼の極」・統一戦線として「共産主義者協議会」を結成する。同時にプロレタリア(無産者)の共同政治新聞として『赤いプロレタリア』を創刊する(以後『赤星』は休刊とする)。

この共産主義者協議会(準)は、①共産同(ブント)の綱領的・戦略的・路線的な立場とその実践的な地平を継承し、共産主義運動の再生を目指す統一戦線であり、②帝国主義・グローバル化に反対する新しい左翼運動の統一戦

線、反グローバル化の連合の形成に資するイニシアティブを創造し、③プロレタリアの国境を越えた連帯、新しい社会運動-労働運動、反改憲運動や新左翼の討論の空間を創る、これらの行動を通して新しい左翼勢力(ブント)再建の礎を築く、以上を基本的任務としてブント3党派が呼びかけた協議会である。

これは、新左翼運動-共産主義運動の再生への新たな一歩であり、いわば「序章」にすぎない。だが、ブント結成50年という節目の時を迎えて、この年が何年か後に振り返って見た時、ブントの歴史にとって「新しい時代の扉を開いた」、そういうターニング・ポイントの年だったと記憶されるように、我々は「新しい左翼の極」として共産主義者協議会を結成し、共産主義運動の再生とブントの再建のために情熱と心血を注ぎベストを尽くすことを表明する。(08年12月20日)



08年1.14山岡 日雇全協主催の総決起集会・デモ



08年6.29東京 反G8デモに立ち上がった持たざる者・NO-VOX

# 反帝-反グローバリズム!

## BUND新時代の扉を開く 共産主義者協議会の結成へ!

### 前衛不在の低迷 を脱するために

今や情勢は一変した。アメリカを震源とするグローバルな金融危機は、世界経済を揺さぶり、世界同時不況の大津波が迫っている。時代は「恐慌前夜」の様相を呈してきた。戦後「冷戦」時代の終焉、「冷戦」後今回の金融危機に端を発した「米国一極支配」の終焉、そして「パックス・アメリカナ」後、「グローバル化と多極化」時代の到来。こうした時代の転換、情勢の変化ゆえに、旧来の政治的パラダイムは大きく揺らぎ、機能不全、劣化、混迷を深めているのだ。

金融危機を招いた新自由主義の破綻とグローバル化のひずみが明らかになる中で、貧困をもたらした労働者民衆を虐げている資本主義そのものに多くの人々が疑問を持ち始めている。貪欲な競争に駆り立て未来を閉ざしている階級社会の歪みを肌で感じ怒りをたぎらせている。貧困や階級問題、社会的な不平等や排除に対する関心が高まり、日本では「蟹工船」が注目を浴び、ドイツでもマルクスの「資本論」が例年の7倍以上売れているのは、この現象を象徴しているといえる。

ところが、「危機の時代」こそ存在意義を発揮するチャンスなのに、多くの左翼は、グローバリズムに対抗する新機軸や現状を打破・変革する新たな戦略・展望を示すことに責任を取ってはいない。反グローバリズム運動のうねりを起こすためのイニシアティブを創

造しているのか、と問われると、いまだに既成概念の重い扉を開けられず、柔軟さを欠いた従来の思考-行動様式を踏襲するだけでイニシアティブのなさをごまかし見通しのきかない混沌の中でもがいているのが実情だ。この国の階級闘争は「前衛不在」ゆえの分散と低迷状況から脱却できず苦境に立たされているのである。

いま求められているのは、この国の右に偏した政治の重心を左に引っ張り返す、草の根レベルから闘いを生み出すイニシアティブだ。それを創造できるかどうかで「前衛党」の存在価値は決まる。闘いの裾野を広げられなくて、どうして反帝闘争、反グローバリズム運動を前進させられるのか、どうして前衛と言えるのか、新左翼に未来があると言えるのか。

社民党、共産党の既成左翼の退潮によって、その「左翼反対派」であることを存在理由としてきたような新左翼の政治的影響力の衰えは覆い難い。しかも、セクト主義に傾斜したヘビー(鈍重)な左翼と市民主義に埋没したライトな(軽い)左翼に二極分化したことによって分散状況は一段と深刻にさえなっている。08年の反G8闘争は、日本のこうした現状を反映する形になった。

### 新左翼運動 再生への序章

反グローバリズム運動が世界的なダイナミックなうねりを見せている中で、この国の左翼運動は大きく立ち遅れている。70年代以降の長い低迷を脱し切れず、この

ままでは「周回遅れ」になりかねないという現状にある。これだけ日本の左翼運動の土壌がやせ衰え水脈も枯渇しかねない状況なのに、なぜもっと率直に自らの立ち遅れを認め、現状に対する危機感を明らかにしないのだろうか。現状への危機感においては「結党以来の最大の危機を迎えている」という自民党やブルジョアジーに比べて左翼の方が劣ってさえるのではないか。セクト的利害に偏し狭い領域でのアイデンティティを求めたり、わずかに見えるプラス面で自己満足に浸ってはい、現状の深刻さが分からず鈍感になる。だから危機感=責任感に乏しく、現状変革へのほとぼる情熱が感じられないのだ。

一党一派や個人の力で新左翼運動の低迷を打破し再生への展望を拓けるのか。独りよがりや自分の言い分をぶつけ合うだけの駆け引きをしている場合ではない。意見が違っても(多様であっても)、相違を「なくす」(単一化する)ことのみ拘泥するのではなく、どこに違いや隔りがあるのかを理解し、「共に力を合わせる」という立場から、意見の異なる相手と討論を戦わせ相違を小さくする努力を惜しまないというスタンスで、どう連携できるかを示す必要がある。そうしないと、大衆からは、相変わらずうぬぼれに浸り、自分を際立たせようとする党利党略やあげ足取り、粗探しなどアン・フェアなマヌーバー政治にうつつをぬかしているように映り信頼を得られないばかりか失望を招きかねないのではないかと。我々は「スーパーヒーロー」とその他大

勢」という類の「ボルシェヴィキ」モデル(単一の党による革命というユニラテリズム)は、もはや時代錯誤であると考え。党派である以上、党的利害を考えないわけにはいかない。だが、一党一派だけのセクト的利害に拘泥する限り、全員が敗者になりかねないのだ。そういう危機感を共有し、新左翼運動の再生へ共に新たな一歩を踏み出すことが求められている。それゆえ現在は、ソヴィエト型統一戦線形成と陣地戦に力点を置くべき時代。今は20世紀型の旧い左翼運動から21世紀型の新しい左翼運動を創る、という意味での「過渡期」に他ならないのである。

### 問われる前衛の イニシアティブ

世界はいま歴史の大きな転換期を迎えている。それは「百年に一度」と形容されるような「危機の時代」であり「変革の時」であり新しい時代への「過渡期」と呼ぶこともできる。新自由主義・グローバリズムの破綻が明確となった現在、政治・経済・軍事などあらゆる分野で、今までの仕組み・やり方・戦略が通用しなくなり、従来のパラダイムは、変革や再編を否応なしに迫られている。日本の政治情勢もまた今後1年、「半世紀に1度の政界再編」(英エコノミスト誌)を迎える可能性があり、それは「大乱の序章」にすぎないかもしれない。左右を問わず日本の全ての政治党派は、従来の政治的枠組みが大きく転換する政治再編の渦中にあると言える。右も左も既成政党が展望喪失と機能不全に陥り右往左往する中で、我々新左翼も情勢を反転させ展望を切り拓くためのイニシアティブを創造できなければ、この時代の再編の波にのみ込まれ存在意義さえ失いかねなくなる。そうした危機感を共有し新左翼運動-共産主義

運動の再生に向けて陣地戦の陣形を整えるべき時代。

「衰退か再生か」存亡の岐路に立たされた新左翼は、「情勢の新しい変化」への臨機応変な対応、すなわちグローバリズムに対抗する戦略の立て直しが問われ、階級闘争のイニシアティブを再創造できるかどうか試される時代を迎えているのである。情勢の変化に対応して新たな戦略を創造すること、これこそが、いわば「時代の要請」に応えるということであり、「前衛の任」なのではないか。壁にぶち当たった時、そこからどうしたら壁を乗り越えられるのか、それを悩み考えるのが「前衛」の役割ではないのか。問題は理念やビジョンだけではなく、それを実行に移す政治的創意とイニシアティブの喪失であり、前衛不在の立ち遅れた現状に対する危機感と責任感の欠如なのだ。

党の存在意義は何によって決まるのか。党はどんな役割を担うのか。我々にとって「前衛性」とは、あらゆる権威主義にとらわれず、過去の過ちや失敗、自らの弱さや立ち遅れ・困難を率直に認め、教訓を学びながら、絶えず現状を打破し情勢を反転させプロレタリア革命への展望を切り拓くこと、そのために、新たな戦略やイニシアティブの創造に責任を取り情熱を注ぐ姿勢である。それゆえ、党はプロレタリアの団結と解放のために存在する。最前線に立って闘いを先導する役割を担うという意味において「前衛」なのであって、そもそもの語源においては司令部を指しているのではない。左翼の中にある前衛=司令部という固定観念は、スターリン主義に歪められ常識として概念化されたものでしかない。党がプロレタリアの上にあるわけではない。党は「プロレタリアの前衛」の任を担い、プロレタリアの抵抗・連帯を広げること、そこに党の存在意義・役割がある。



11.3「持たざる者」の国際連帯行動の街頭デモ（東京・渋谷）



11.9韓国ソウル4万人の民主労総主催の全国労働者大会

# プロレタリア国際主義！

左翼運動の土壌がやせ衰えている現在、セクト的な自己満足に浸っている場合じゃない。現状が深刻だからこそまず土を耕し種を蒔き芽を育てるところから始めねばならない。

## 自らの立ち遅れを認め 新しくやり直す思想

スターリン主義に歪められた従来の「レーニン党組織論」の固定観念や既成概念に縛られてきた我々が、旧いパラダイムから脱却し訣別することは容易ではなかった。だがレーニンの本来の組織思想に立ち戻って学んだことは、何よりも組織（形態や活動方法）は、情勢の変化や闘争の発展段階に照応して絶えずつくり変えねばならない、という「組織の自己変革」の思想である。それは、いくつもの困難や苦しみ、抑圧を乗り越え、「鉄と火の試練」をくぐらなければならない革命への途上で、自分自身の弱さや誤り・失敗・立ち遅れを率直に認めることをおそれず、自己変革をおそれないということである。これこそが、レーニン組織論のエッセンスであり、レーニン自身の組織実践から学ぶべき思想である。それを組織や運動に内在化・血肉化することが、共産主義者にとって最も肝心なことであると考えよう。

こうした組織思想を欠いた場合、自分自身の立ち遅れや欠陥・誤りを認めようとせず、隠し、偽り、失敗から教訓を学ぶ契機を自ら閉ざして自己変革を拒んでしまう。自分自身の改革（切磋琢磨）を怠った運動や組織は、いつかは錆つき劣化し腐って朽ち果てるか、官僚主義や権威主義・自己欺瞞・虚栄心がはびこるアン・フェアな体質に墮することになる。それゆえボルシェヴィキ党の「負の歴史」に向き合いそこから苦い教訓を学ぶ必要があり、そうしなければ同じ轍を踏むことになるの

だ。スターリン主義から訣別して出発したはずの「新しい左翼」の多くが、実は組織論においては「レーニン主義」を標榜していてもスターリン主義のそれと五十歩百歩の内容——一枚岩の党と分派禁止——にとどまり、レーニンの「最後の闘い」を闇に葬り去ったボルシェヴィキの過ちから学んでいないのである。口先ではスターリン主義を批判していても、自らの失敗や誤りを隠蔽し偽りという組織体質や組織の在り方は大差ないのもこの所以に他ならない。

「時とすると愚劣でこっけいな『小グループ』の『いさかい』を、党の自己教育のための有益で必要欠くべからざる材料に変える」（レーニン全集7巻）ことができなかったブントは、レーニン主義とは似て非なる組織でしかなかった。党的団結を強められず幾度も分裂を繰り返して大衆の失望と幻滅を買ったと言わざるをえないのだ。「築城3年、落城3日」と言うように、築くには時間がかかるが壊すのはあっけないのだ。

レーニンは晩年（1922年）大切なのは、共産主義者・革命家がプロレタリアの前衛の役割を果たしうるには、「自分の状態を冷静に評価することができ、自分の誤りを意識することをおそれない」、「肝心なことは、どこでそういう誤りがおかされたかを、冷静に見てとり、万事をはじめからやり直す能力を持つということである」と述べ、我々自身の中にある欠陥として、「一見ばつが悪いように見えること」や「侮辱的にも思われる不愉快な真理」を認めようとしなさいという点、「不愉快な立場に立つことを、すなわちはじめから学びはじめることを、我々がやりたがらない点にある」と指摘している。そして、「いままでは肝心なことは、前衛が、自分自身を教育することをおそれず、自分自身を改造することをおそれず、自分には訓練も能力も足りな

いことをあからさまに認めるのをおそれないことである」として「すなわち、第一に、学ぶことであり、第二に、学ぶことであり、第三にも学ぶことである」（レーニン全集33巻）と述べたのである。我々にとって、レーニンの思想とは、レーニン主義とは、まさに前衛が自分自身の立ち遅れた現状や弱さ・誤り・失敗を率直に認め、自らを変革することをおそれない、「はじめからやり直す能力」（自己克服力・復元力）を持つことの大切さを説いた点にこそ核心があると考えよう。この視点は、旧来のドグマに縛られてきたかびくさい教条的な解釈とは明確に異なるのだ。

我々は、レーニンと同様の思想をマルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』（1852年）にも見出すことができる。「プロレタリア革命は、絶えず自分自身を批判し、進みながらも絶えず立ち止まり、すでに成し遂げられたと思えたものに立ち戻っては、もう一度新しくやり直し、自分がはじめにやった試みの中途半端さ、弱さ、けちくささを、情け容赦もなく、徹底的に嘲笑する」と、「煉獄を通る旅の途上にある」革命は、常に新たな試練に立ち向かい、「問いかけながら前へ進む」（サパティスタ）ことを求められるのである。まさにマルクスやレーニンから今日においても共産主義者が学ぶべきは、「絶えず自分自身の不十分さ・弱さを批判し、もう一度はじめから新しくやり直す」という思想なのではないか。

共産主義者は、長く険しい革命への試練の途上で、絶えず「もう一度新しくやり直す」というマルクスやレーニンのこの思想に立ち返ることが決定的に重要だ。共産主義運動—プロレタリア解放運動を再生するためのイニシアティブの創造が、今ほど求められている時はないからである。

## ブント結成50年を エポック・メイキングに

今や情勢は、日本と世界の政治地図が大きく変わろうとする転換期を迎えている。今後1—2年で、20世紀には予想もつかなかった激しさを矛盾が噴出し、世界がドラスチックに変わるかもしれない。そういう可能性も大いにありうる「変革の時期」「新しい時代への過渡期」に我々は立っている。だが既成政党は民意をつかめず新しい展望を示せない。「時代が人を呼ぶ」という言葉があるように、今こそ共産主義運動再生—新左翼運動再生への「新たな胎動」があることを示す必要がある。

左右を問わず情勢（時代）の変化を理解しそれに対応する有効なポリシーを持たない政党は行き詰まるしかないのである。危機と混乱の度合いが深まるほど、人々には不安感が広まり現状打破への渴望と変革への希望が生まれる。これに答えられるかどうかで政党の存在意義が試される。

新自由主義政策に基づいた「構造改革」による不安定雇用、貧困の拡大、不公正・不平等な社会保障のひずみを巡ってどう対応するのか、その明確な政策を立てられないところに、安倍、福田の両政権の投げ出しと右派政党の混迷、政治家の劣化がある。

新自由主義・グローバリズムに対抗する新機軸、新たな戦略を立てられない左翼もまた展望を喪失し遅かれ早かれ衰退せざるをえない。情勢がドラスチックに転換し激動する時代にあっては、どういう社会を創るのかというビジョンとそれを実現するための具体的なポリシー、戦略的な展望とイニシアティブがますます問われるのである。

この国の歴史の舞台に新左翼を登場させた共産同（ブント）は、

今年結成50周年を迎えるが、「プロレタリアの前衛」「新しい左翼」としての存在意義を示せるかどうかの瀬戸際にある。70年安保闘争の敗北以降、ブントは分裂し新左翼運動総体も長い低迷を余儀なくされてきた。革共同に比して組織力量においても大きく後れをとり後じんを拝してきた。かつて闘いのダイナミズムや新たなインターナショナリズムを切り拓いた輝きは失われ、今日の「前衛不在」の状況をもたらしたと言える。

こうした「負の歴史」や自らの弱さ・失敗から目をそらさず、教訓を学ばない限り、同じ過ちを繰り返す、新しい時代を切り拓けない。世界の情勢が大きく変わる時代を迎えて、ちやちやセクト的駆け引きや粗探し、マヌーバー政治にうつつを抜かすネガティブな内向き思考に陥っている場合ではない。これだけ変化の激しい時代、世界の新たな現実、変化する情勢に対応できないような党派やイニシアティブを発揮できない組織には未来はないのである。

我々は情勢が反転するのをただ座して待つ余裕はないのだ。転機はどっから訪れるのではなく自ら創るものだ。今後5年—10年のタームを、我々は、新たな共産主義運動の創造に向かう、低迷する新左翼運動の再生に向かう、「過渡期」と位置づける。そのための新しい一歩を踏み出す「共産主義者協議会」の準備会の発足（08年12月20日）とブント系4者による共同声明の発信に我々はこぎつけた。

我々の前途は険しく道程は遠い。だがサパティスタの「問いかけながら前へ進め」という言葉にあるように、我々は、常に「プロレタリアの前衛」としての存在意義（レゾンデートル）を問い返しながらか、自らの立ち遅れ・弱さから目をそらさず、現状を打破しな

ければ将来がないという危機感と自ら変わらざるを得ないという自覚とそして何よりもプロレタリア世界革命への情熱、これを共有し力を合わせ前進しなければならぬ。

我々は、他にはない(ナンバーワンではなくオンリーワンの)「大きな存在感のある少数派」として「新しい左翼の極」を創る。ブント結成50周年の節目が、歴史に残る「新たな1章」として刻まれるかどうかは、この先の行動で決まる。2008年12月が、新たな試練に挑むブントのターニング・ポイント、新しい時代の幕開け(エポック・メイキング)の年として記憶されることを願う。

### 反グローバリズム運動の拠り所

グローバリズム・新自由主義にとって最も虐げられ困窮生活を強いられている持たざる者・無産者・プロレタリアは、暴利をむさぼり富を独占し続けている為政者・ブルジョアたちに、世界中で「もう、たくさんだ!」と怒りの声をあげている。

一握りの豊かな国の「持てる者」が富を独占し世界を思うままに支配している中で、圧倒的多くの「持たざる者」が貧困に苦しんでいる。それが、資本主義・グローバリゼーションのいびつな仕組みである。だが、「恐慌前夜」といわれるほど深刻な経済危機によって、世界はいま同時不況と大

失業の嵐に見舞われている。「経済成長によって大企業が利益を得、その恩恵のしずくが一人一人に滴り落ちる」という新自由主義のシエマ(トリクルダウン)がすでに破綻し崩壊寸前にあることが誰の目にも明らかになった。

こうしたグローバリズムに対抗する新機軸・新たな戦略を打ち立て、草の根の「カウンター・パワー」を組織して反グローバリズム運動のうねりを起こす。そのことによって、「世界は変えられる!」「希望は取り戻せる!」と心に響くメッセージを発すること、このことが今ほど左翼に求められている時はないのだ。こうした「時代の要請」に応え情勢を反転させるイニシアティブを創造できるかどうかで、「前衛」の存在価値は決まるのである。

90年代以降、新自由主義政策の下で、労働市場の「規制緩和」が進められ、労働市場から排除される失業と就労を繰り返す「半失業・半就労」状態の不安定で低賃金の雇用を強いられた——いつでも「雇用調整」という名の「使い捨て」可能な——パート、派遣、契約、日雇などの非正規の「下層労働者」が膨大(今や就労者の3人に1人)に生み出されることによって「新たな貧困」が深刻な社会問題としてクローズアップされるようになった。

不安定な働き方を余儀なくされた労働者には、医療・年金・雇用保険もほとんどなく、賃金ばかりか福利厚生、公的サービスなど社

会保障における権利、社会的権利から排除される不平等を被っている。中には困窮生活から安定した居住の場(居住権)も失い、「ホームレス」状態に陥った人(いわゆる「ネットカフェ難民」など)も増えている。このように社会的権利から排除される「社会的排除」が、生存権を脅かされた「ワーキング・プア」など「新たな貧困者」を増大させている背景にあるのである。

こうして貧困や社会的排除の問題が、社会の底辺部に周縁化(マージナル化)された少数者(マイノリティー)のみに関わる問題ではなく、多くの労働者が直面している(あるいは直面しかねない)社会的な不公正・不平等を象徴する主要なテーマとして認識せざるをえない社会状況になった。「新しい社会運動」の広がりを見せているフランスなど欧州では、「社会的排除」との闘いは、社会運動における、また社会問題を語る際のキーワードになっている。そして、新自由主義的な労働政策に対する闘いの中で、「プレカリアート(不安定)」を許すなというスローガンが登場し「プロレタリアート(貧民)」という言葉とかけ合わせた「プレカリアート」という造語も生み出されたのである。

ところがグローバリズムによる労働者の有り様の変容に対応できないばかりか、自分たち組合員だけの狭い既得権益を守ることに汲々として体制内化した日本の労働組合の多くは、賃上げのみで生活

破壊に対抗できるという経済主義にとどまり浸っている。それゆえ貧困問題の背後にある社会的排除との闘いをテーマにすることができず、労働組合自身を「社会運動の支柱」へと脱皮することを妨げている。アメリカの左派労働運動のように、「社会運動ユニオンズ」というポリシーで、非正規労働者や失業者、移民、貧困者との連帯に力点を移し、生存権(全ての人に保障されなければならない公正・平等な生きるための権利)のために社会的排除と闘う「新しい社会運動」との連携を重視した労働運動へと戦略を転換させない限り、「労働運動の再生」はありえない。恩恵を被ることなく貧困に苦しんでいる人々と同じ労働者として理解できない労働組合に未来はないのだ。

資本主義・グローバリズムは、「弱肉強食」と「命よりカネ」の貪欲な競争に駆り立て、「持たざる者」の目と耳と声を塞いでいる。誰かを犠牲にして成り立っているような「繁栄と平和」はフェア(公正)ではないのだ。私たちが求めているのは、恩恵や施しではない。全ての人に保障されるべき公正で平等な権利を求めているのであり、それが脅かされている現実から目を背け、おし黙っていることはできないのだ。「生きるために抵抗しなければならぬ。抵抗することが存在することそのものだ!」(仏NO-VOXのアンニー・プール)

「現代社会の最下層であるプロ

レタリア」(マルクス『共産党宣言』)の深部に宿った怒りをエネルギーに、国境を越えた連帯を拠り所に、「希望のインターナショナル」を立ち上げよう。「越せぬ扉はない。開けられぬ扉はない。崩せぬ壁はない」(サパティスタ)のだ!

### 革命の種を蒔く

虐げられし持たざる者・無産者・労働者—プロレタリアの心の底に潜在する怒りは、地下深くにあるマグマのように蓄えられ、いつか火を噴き上げるにちがいない。だが、それは1年後なのか、それとも自分が生きている間には起きないのかが分からない。それでもたとえ私たちが生きている間に結果を見ることができなくとも、かつてゲバラが革命への試練の途上で語ったように、「我々は次の世代のために革命の種を蒔いている。それがいつか実を結ぶであろうことに希望を持っている」。

我々は、「世界の変革」と「プロレタリアの解放」のために「希望と情熱」の火を絶やさず、反帝—反グローバリズムと新しいプロレタリア国際主義の旗を掲げ、共産主義者として闘いに心血を注ぎベストを尽くすことによって、未来と次代に対する歴史的使命を果たしたいと思っている。

いくつものさえぎる壁を乗り越えて、燃え上がれ怒りのレジスタンス!プロレタリアの国境を越えた連帯が世界を変える!

## 「持たざる者」の国際連帯行動勝ち取る

### 11月韓国労働者大会 12月NO-VOX国際会議に参加



11・3「持たざる者」の国際連帯行動(恵比寿区民会館)

11月3日、東京・恵比寿区民会館にて「持たざる者」の国際連帯行動が、120名の参加で勝ち取られた。2003年来、11月の行動は6回目になるが、今年は6~7月洞爺湖サミットに抗する国際連帯行動が、フランスNO-VOXの仲間とともに東京—大阪—名古屋—北海道を貫いてともに闘われ、併せて「貧困と労働」ワーキンググループを立ち上げての取り組みも大きな成果だ。集会はこうした地平を全体で確認した上で、沖縄や新潟など、各地からの連帯メッセージを紹介した上で、アピールに移る。まず、この10月にパレスチナを訪問したJAPACの原さんから、パレスチ

ナの現状と連帯・交流の報告、問題提起がなされた。続いて、釜ヶ崎パトロールの会から大阪府・市の排除行政との闘い、外国人労働者の労働争議など権利擁護に取り組むAPFSからは当該労働者が登壇、地域共闘交流会、沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック、すべすアライズ、アパート居住者を食い物にする「貧困ビジネス」の実態を暴き反撃するスマイルサービス闘争を支援する会、宮下公園のナイキ化計画に抗して闘う渋谷のじれん、生活保護集団申請を通して行政の不当な対応と闘う山谷労働者福祉会館活動委、麻生邸「見学ツアー」3名不当逮捕への緊急抗議アピール(11月6日に

奪還)と続いた。最後に11月韓国労働者大会への参加、12月フランスで行われるNO-VOXの国際交流集会への派遣・参加を確認、集会決議を参加者の拍手で採択し、集会を終えた。デモでは、渋谷の繁華街に怒りのシュプレヒコールが響きわたった。

### スペイン当局の入国拒否に抗議 NO-VOXが世界同時行動

12月8日から、パリにおいて世界各地12か国からの参加者が集い、NO-VOXネットワークの「国境を越えた出会い週間」の催し(集会、デモ、現場交流など)が1週間にわたって開催され、日本の「持たざる者」の国際連帯行動実行委員会から2人が参加した。この集会に参加する予定でパリに向かっていったブラジルのMNLN(住宅への権利のための全国運動)のメンバーが、ブラジルからの経由地マドリッドで、スペイン入管による上陸拒否にあり、フランスに到着できなかった。NO-VOXはただちに抗議声明を発し、12月18日にはスペイン当局に抗議する世界同時行動を呼びかけ、東京でもスペイン大使館への抗議・申し入れが闘い抜かれた。

## 生存権を掲げ冬将軍を迎え撃て! 山谷越年・越冬闘争へ結集を!

●08-09山谷越年-越冬闘争 12月28日(午後)~1月5日(朝) 山谷・労働センター前を拠点に連日、共同炊事など

年の瀬に向かって倒産や首切りの嵐が吹き荒れている。連日のニュースでも、解雇され寮を追い出された派遣労働者の多くが文字通りのホームレスとして年を越さざるを得ないという切実な状況だ。こうした中、越年・越冬闘争を前に既に新しい野宿者が続々と共同炊事の現場に合流してきている。山谷争議団として取り組んだ最初の越年-越冬闘争(81-82)のスローガンは「冬の時代を越える冬の闘いを!」であった。越冬闘争とは単に冬を越す(しのぐ)闘いではない。昔も今も「黙って野垂れ死ぬな!」を合言葉に、仲間が団結して仲間の命を守り、野垂れ死にを強いる状況に抗し、共に反撃の烽火を上げてゆく闘いとしてある。山谷ではこの間、共同

炊事一寄り合いを通じて、排除—追い出しを許さないつながり、居住権—生存権を取り戻す取り組みとして(台東、墨田)生活保護集団申請行動を積み上げてきた。この間、台東区は集団申請に対して理不尽な対応に出てきている。生存権をないがしろにする行政の横暴を打ち破ろう。同時に、労働相談—争議を通して不安定就労層との共闘も目指してきた。独自の「越冬闘争」を呼びかけたフリーター全般労組との連携も開始されている。宮下公園のナイキ化計画と対決して闘う渋谷越年-越冬とも結び、厳冬の時代を撃ち春を準備する熱き連帯をつくりだそう!

1・12日雇全協反失業総決起集会・デモを全国の仲間とともに闘おう!

### 1・12 日雇全協反失業総決起集会

佐藤満夫さん 虐殺24カ年 弾劾・追悼  
山岡強一さん 虐殺23カ年 弾劾・追悼  
●1月12日(月)10時 山谷・玉姫公園  
●主催・全国日雇労働組合協議会

3・29三里塚全国集会へ!

### 1・11 三里塚新年デモ 団結旗開き

●1月11日(日)、午前10時 東峰十字路北側開拓道路 集合 敷地内デモ  
●午後1時・成田市内で団結旗開き  
●主催・三里塚芝山連合空港反対同盟